

ぞかし、

〔歴世女装考〕櫛の始原、擲櫛を忌縁湯津津間櫛の考、

此説○古事記傳に據ば、湯津津間又爪櫛といふは、何にて作りたる質かは、えられねど、齒は、えげくせ

まりて、今の櫛よりは、長き物なりといふ解なり、○中竊に謂く、岩瀬百櫛の火に燃るをもて、樹中略

木なる事論をまたず、すでに湯津桂といふ木もありしをや、○中和名抄部木柞四聲字苑云、柞和

名由志、漢語抄に云、波々曾木の名、堪作梳也とあり、湯と志とは、音近きゆゑに、湯津の津を後年

には由之といひけんかし、○中これらに據ば、柞は和漢ともに梳材梳は櫛なる事、和漢同じ、柞

を近くは國によりては、そくしの木ともいふ、本草、啓蒙、えかれは、今偽黄楊とする櫛は、柞にて、神

代の湯津津間櫛も、柞木櫛なるめりとぞおもはる、○中さて津間櫛といふ名義、○中竊にお

もへらく、齒のつまるは櫛の常體なり、けだし梳に對てつま櫛といはんも、穩ならず、おのれは

袖中抄に、つまは妻の義かといふ説に従事、愚按に、妻櫛といふ義は、左右の髻に相對て、双つ刺

物なれば也、此櫛一枚にては、奇にて用をなさず、それいかなとなれば、上代の男は、髻をば一ツ

に結て、双にわけ、左右へ縮たるを櫛にて、刺貫て宿おくなり、これを髻といふ、○註されば、件の

黄泉段にもはじめは、左りのびんづらの櫛をなげ玉ひ、二度目は、右のびんづらの櫛をなげ玉

へり、○註必一對なればならぬ物ゆゑに、夫婦に儀て、夫婦櫛といひけんかし、○中一日學友來

りて物語のつひで、櫛の事をかたりしに、いふやう、前年西遊せし時、南都の達識穂井田忠友翁

の宅にて、同人撰觀古雜帖本寫といふ物を視し中に、一古寺の寶物とて、神代の櫛を視て、摸寫たる

を一覽して、心に忘すまかぐなりしとき、てうれしくその儘席上にて、闡記の圖を寫させ

たるを下に出す、此圖をみれば、むかしは櫛をかんざしともいひしは、うべなり、髪をとかすべ

き物にあらず、因ておもふに、神代に解梳は、別に有けんかし、